



史跡志苔館跡全景（西側上空から）

## 志苔館の歴史

中世の蝦夷地（現在の北海道）で、和人が道南地域に築いた12の拠点をも「道南十二館」といいます。志苔館はその内の最も東に位置する館です。志苔館以外には、箱館や大館などが存在していました。

松前藩の史書「新羅之記録」中に、1456年のコシャマインの戦いと1512年に起きたアイヌとの戦いにより館が陥落した記述がみられ、それ以降記録に登場することがなくなることから、その際に志苔館は事実上廃館となったものと推定されています。

函館市教育委員会は1983年から史跡整備を目的とした郭内外の発掘調査を実施し、建物跡などの遺構と中国製陶磁器などの生活用具類を確認しました。また郭内の建物の構造などから、郭内が大きく3期（14世紀末頃～15世紀初頭頃・15世紀中頃・16世紀以降）にかけて移り変わったことが明らかとなりました。



史跡志苔館跡平面図

## 志苔館跡の構造

志苔館跡は、四方に土塁が巡らされ、沢地形などを利用して空壕が掘られています。土塁で囲まれた郭内は、東西70～80m、南北50～65m、約4,100平方メートルの規模で、土塁は北側が4～4.5m、南側は1～1.5mの高さとなり、西側と東側は土塁が途切れて、それぞれ出入口となっています。

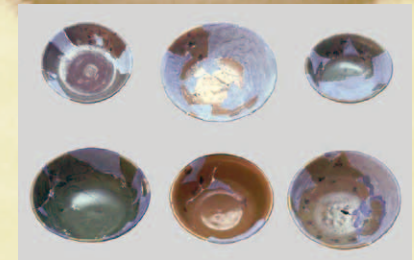
また、北側と西側の空壕は幅5～10m、深さ最大3.5mほどで、断面が薬研または箱薬研の形状となり、特に西側は土橋を挟んで二重壕が掘られています。



調査で見つかった郭内の井戸跡



調査で見つかった郭内の建物跡



郭内から出土した陶磁器

## 国史跡指定と史跡整備

志苔館跡は1934年に国史跡に指定され（1977年に追加指定）、1983～1985年に実施した発掘調査の成果を基に、1988年までに整備を実施しました。

郭内については、創建期と想定される建物跡、井戸跡、柵跡、柱穴跡などの平面表示整備を行いました。また、郭外の空壕や小土塁についても表示・張芝等の整備を行い、史跡公園として保存するとともに広く一般に公開しています。